



札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	両親の離婚を契機に不登校となった男児への援助-家族システムの変化に焦点を当てて-
Author(s)	澤田, いずみ
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要,第 1 号: 63-67
Issue Date	1997 年
DOI	10.15114/bshs.1.63
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6602
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n13449192163.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

両親の離婚を契機に不登校となった男児への援助 —家族システムの変化に焦点を当てて—

澤田 いずみ

札幌医科大学保健医療学部看護学科

要 旨

この報告は、不登校症例への家族看護援助方法を探ることを目的としている。症例は、両親の離婚を契機に5年に渡って不登校となっていた14才の男児である。看護師は医師の家族面接と平行して症例に対して週に1度の頻度で1対1の遊戯療法を基盤とした面接を行った。34回の面接の結果、症例は高校へ進学するに至った。この過程から、1. 家族システム、特に両親サブシステムの機能不全が症例の不応適レベルと連動していたこと、2. 家族面接により両親サブシステムの機能に回復が促され、これに伴い症例の適応レベルにも改善が見られたこと、3. 看護師との関係性に基づく面接は症例の自我機能の低下に改善を促したことが示唆された。以上のことから、不登校症例への援助には、看護師が症例との支持的な関係に基づき過渡的なシステムとして機能しながら、彼らを通じて混乱を表している家族システムに目を向け、両親サブシステムの強化を促すことが重要である。

<索引用語> 不登校、家族システム看護、離婚

はじめに

この数10年、情緒、行動、対人関係上の問題を抱える患者に出会ったとき、その症状を主要な生態学的なコンテキスト、すなわち、家族システムのなかでとらえて援助するという家族アプローチが広まってきている¹⁾。

看護の領域においても、家族を1つのユニットとして援助するという「家族システム看護」の研究が進められている²⁾。

今回、両親の離婚を契機に5年間に渡って不登校となっていた14才の男児に対して、外来での面接を行った。不登校症例への家族看護援助の方向性を探る一助として、症例が登校に至るまでの援助過程を離婚後の家族システムの変化に焦点を当てて報告する。

研究方法

C大学附属病院精神科児童外来にて、H2年4月からH3年3月まで、遊戯療法に基づいた面接を行った。平行して主治医は家族面接を行った。症例への面接は、1回50分、週に1回の頻度で行った。面接後は、看護師の記憶を基に面接記録を起し、主治医からのスパービ

ジョンを受け、合わせて、主治医の家族面接の報告を受け、検討会を持ちながら、援助を進めた。これらの記録を基に援助過程を考察した。

結 果

<症例紹介>

症例B（以下B） 14才 主訴 不登校
性格傾向 おとなしい、やさしい、内弁慶。

<生育歴と受診までの経過>

Bは幼い頃から父親っ子であったが、Bが小学校3年生の時、父親は、母親の感情的な養育態度を理由に家を出て、音信不通の状態となった。この頃から、Bは学校を休みがちとなり、小学校6年生の時、両親は正式離婚し、Bは父親に引き取られるが、転校先で全く登校しなくなった。父親が無理矢理いかせようとする、Bは足踏みをしたまま玄関から出られなかったという。Bは自分から希望し母親のところへ戻り、中学に進学するが登校せず、中学3年生となり、教育センターの紹介で、母親に連れられて、当外来を受診した。

<生活環境>

Bは母親と妹と3人でC県の6畳の1Kのアパートに

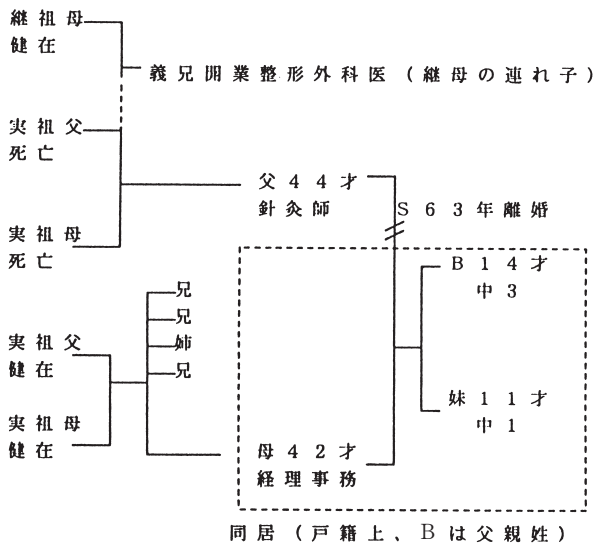


図1 世代関係図

住んでおり、父親は都内に一人暮らしをしていた。
 <家族背景> (図1参照)

父親：義理の兄が開業する整形外科病院に針灸師として勤めている。将来は整骨院の開業を考えている。社会的で明るい性格である。

母親：明るくさっぱりとした性格で、以前にも離婚歴があるが詳細は不明である。父親は「(母親は)子どもに焼き餅を焼き、子どもにあたる」と、母親役割をとりきれないところを離婚理由にあげている。離婚後、建設会社の経理事務の仕事に就いている。

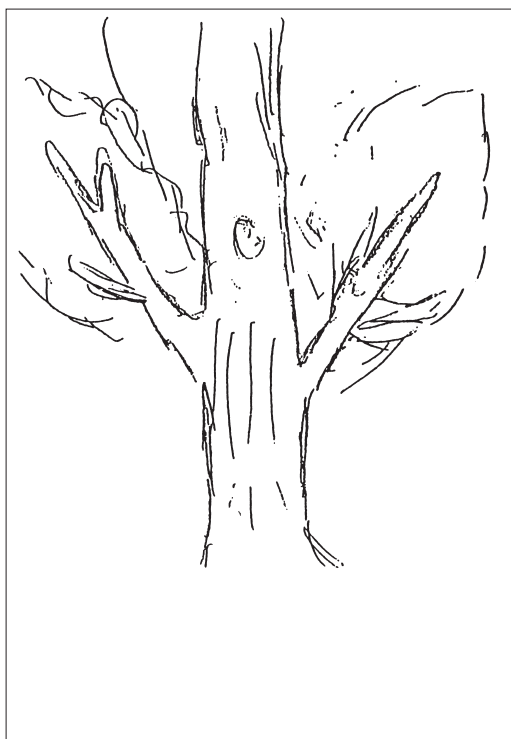


図2 HTPテスト木の絵

妹：明るく活発で、注目を引く子である。

<Bの面接経過>

Bの面接での様子と、家族システムの変化の観点から、面接経過を5つの時期に分けて報告する。

第1期 (初回から第6回)

「ここはB君がどうしていきたいか一緒に考えるところ。遊びながら気楽にやっ行ってこう」と契約を結び、Bとの面接が始まった。初回面接でHTPテストを促すと、抵抗無く応じた。自己を表すという木の絵は(図2)、画面に収まり切れず描かれ、根が無く、枝先の終点が曖昧で、幹には穴が描かれた。このことから、Bはエネルギーを十分に持ち合わせているが、土台の安定性のなさから先行きを見失い、さらには心的な傷を負っていることが読みとれた。さらに、不登校について、淡々と語りながらも情緒面の話しには沈黙する様子から、感情的なものに触れていくことの難しさを感じさせた。しかし、飼っている猫についてはよく話し、「親子の猫はいつも一緒にいる」「飼っている猫は弱虫で、いつも逃げてる」など、猫に自分の思いを投影して語っているようだった。看護師は、解釈は行わず、ゆったりと話を聞き、主治医が父親に連絡を取るときも必ずBの承認を得てから行うなど、家族の中で置き去りにされがちだったBの思いを尊重した関わりを心がけた。

父親は、主治医の呼びかけに快く応じ、外来を訪れ、HTPテストの結果の説明や、「B君と一緒に過ごす時間を作って下さい」とアドバイスを受けた。父親は「子供が生まれてから母親と衝突するようになり、不仲を見せるよりは離婚した。」「Bの不登校は自分の責任。母親には育児のカウンセリングをお願いします」と話し、母親への非難を伺わせながらも、週末にはBと一緒に過ごす等協力的な姿勢を見せた。

第2期 (第7回から第10回)

この時期は、絵画や夢の話を通して、焦りなどBの内的な葛藤が表現された時期である。スクイグルゲーム(相手の線を絵にするゲーム)では、必死にカヌーを漕ぐ少年の絵を描いたり、落ちていく自分を見てもう一人の自分が笑っているという夢が語られ、Bの焦りや不安の表現と考えられた。

また、学校の誰かに通院中に出会う可能性のある日は、会うのをさけて外来を休む、担任教師の家庭訪問には拒否的な様子など、Bの回避的な傾向が母親から報告されていた。これらのことから、Bはまだ内面の安定性を取り戻しておらず、外界から引きこもることで自己を防衛していると考えられた。看護師は、ありのままのBを受けとめ、安心できる場を提供できることを第1に考え、遊びを楽しむことを中心に関わった。

この頃は、父親と母親の間には葛藤状態が続き、休日にはBは父親と、母親は妹と行動するといった状況であった。母親も身体症状を訴え不安定で、住宅状況も一間に

3人で暮らすという状況のままであった。

第3期（第11回から第24回）

この時期になると、Bはゲームの中で自分で目標を決めて取り組むようになった。マージャンゲームやビリヤード、ダーツ、卓球といった男の子らしいゲームに積極的に取り組んで、自分の決めたゲームのなかの目標を一つ一つ達成していき、焦りをゲームの中で発散していると考えられた。この一方で、Bは母親に対して激しく暴言をぶつけるようになり、母親はBと外来に来ることを嫌がり、外来を休みがちになった。面接によってBの内的エネルギーが動き出し、母親へ向かったと考えられた。こういったBの変化を母親だけで受けとめることは難しいと考え、ここで、主治医と相談し、父親に再度来院を呼びかけた。

父親はBと妹を連れて来院し、主治医からBと母親の関係や住宅環境のことが話されると「子どもも思春期。このままではいけない」と理解を示した。

これを機に再びBは母親と通院してくるようになった。さらに、離婚後初めて家族が4人で食事をしたことが母親から報告された。

この後の24回目の面接で、Bは「コンピューターグラフィックをやってみたい。でも、夢だよ」と、具体的な自分自身の展望を静かに語り始め、内的な安定性の高まりを伺わせた。看護師は「好きなことならできるかも」と伝え、Bの前向きな姿勢を保証して関わった。

第4期（第25回から第32回）

この時期になると、家族環境、学校関係で改善が見られ始め、Bも進路について具体的に迷い始めるようになった。

Bはジグソーパズルの「離陸する戦闘機」に取り組み、心的過程の進展を感じさせた。父親からパソコンを買ってもらい、住宅環境も父親の援助で改善され、Bは母親のすぐ近くのアパートの部屋で生活できるようになった。また、この頃から、担任教師の訪問を受け入れるようになり、進路についての情報が与えられ、放課後に登校するなど、現実的な問題へ取り組み始めた。母親も、Bの身体を気遣うようになり、ゆとりを見せ始めた。

面接では「高校は無理だと思う」「バイトは道路工事とかなら身体のきくうちはいいけど」と進路についての迷いを語り始め、看護師は、現実的に考えられていることを保証しながら、支持的に関わった。

第5期（第33回から終結第34回）

この時期、Bは学校の働きかけに応じて、クラスメートの迎えを受けて、登校を開始した。卒業式にも父親と参加し、外来を7週間休んだ。さらに、定時制の工業高校を受験し、進学が決まるという急展開を見せた。その後の面接でBは「コンピューターグラフィックをやりたいから工業高校にした」等、受験までの経過と自分の考えをよどみなく語った。また、自己を投影した飼育猫

も「最近外へ出たがる。追いかけるのが大変」と生き生きとした様子に語られた。外来は何かあったらまた始めるとのことで、Bと母親の希望を取り入れて終結となった。

終結から4カ月後、「Bは高校には毎日通い、テストでは一番だった、月に1度の家族4人の食事もある定期的に行っている」と父親から看護師へ電話が入っている。

考 察

1. 不登校と家族システムの関連について

思春期の子どもを持つ家族の果たす役割には、自立への励ましとしての「踏み台」の機能と再依存を保証する「癒しの場」としての機能が求められる³⁾。

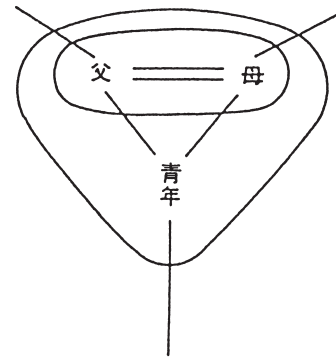


図3 青年を持つ家族の機能的構造（中村、1991）

このような家族システムを中村⁴⁾は図3のように示した。両親サブシステムの安定性が世代間境界を形成し、上記の機能を果たす基盤を成立させることとなる。両親サブシステムの脆弱性が子どもの不適応に影響することは多くの研究により示されている¹⁻⁵⁾。

Bの家族は、子供が産まれた頃から、父親をめぐって母子が競争的な関係となり、Bが思春期に入る頃、父親が夫・親役割を放棄する（家を出る）という形で破綻した。残された母親は、上記の家族の機能を一人で果たすという課題を課せられることとなるが、元来親役割を取りきれない母親には、そのゆとりは無かったと考えられる。

Bの不登校は、こういった家族システムの機能不全が、父親との結びつきが強かったBを通して露呈したものと解釈できる。

家族システム論において、不登校は、両親のコミュニケーション不全の「取り持ち役」（Hoffman.1981）を演じていると考えられている⁵⁾。Bの不登校の発症は、両親の別居時期と一致しており、さらには、戸籍上は父親に所属しているBが、Bの希望で母親と同居し、不登校となっていたことにより、両親には互いに連絡を取る必

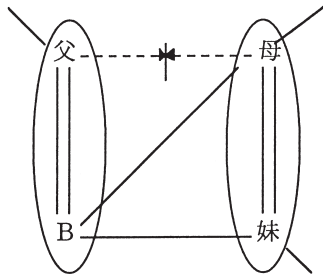


図4 第1期から第2期の家族システム

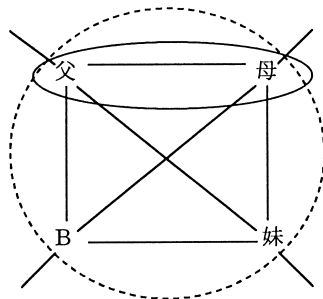


図5 第3期から終結以降の家族システム

要性が生じていた。この意味においてBの不登校は離婚した両親のパイプ役を担っているといえる。

ここで、Bの受診当初から終結までの家族システムの変化を考察してみる。

受診当初（第1期、第2期）の家族システムの図を図4に示した。当初、母親は復縁を望んでおり、父親はこれを拒否している状況であり、両親は対立関係にあった。子ども達もそれに巻き込まれており、それぞれの同性の親と行動し、家族関係は男と女に分裂した状態であった。いわば、両親サブシステムはほとんど機能していない状態である。さらに、Bは度重なる転校のため友達を持たず、家庭内に閉じこもらざるを得ない状況であった。

しかし、Bの外来中断を契機に父親を再度面接場面に引き入れたことにより、家族システムに変化が見られ始めた。

父親の2度目の面接（第3期）以降の家族システムの図を図5に示した。この父親面接以降、家族4人で食事をする、さらには、子どもの住居環境をめぐって両親が話し合いを持つ、といった両親サブシステムの機能に改善が見られ始めた。この頃から、Bは学校側の働きかけに応じ始め、登校を開始しており、Bの家族システムは

思春期の情緒的発達を促進する基盤を取り戻したものと考えられる。

以上のようにBの不登校の背景には、家族システムの機能不全が関連していた。そして、一方で、Bの不登校を通じて両親はこれまでの機能不全を改善していく糸口を見いだしたと言えるだろう。

2. 不登校への看護援助について

次に、看護者のBとの面接を考察してみる。

Bは心的エネルギーを持っていながらも、家族という基盤を失い、内的安定性を保ち得ず、社会場面から引きこもる状況が続いていた。

看護者は、こういったBの内面に対して、洞察や直面化といったことは行わず、Bが安心して自分を表現できる場を提供できるように遊技を中心として関わった。この自己表現への保証は、Bが母親へぶつかっていったり、担任教師を受け入れていくといったことの素地となったと考えられる。このような症例の自我機能の改善に加えて、Bへの定期的な面接の継続は家族への援助継続も可能とし、Bの不登校が家族の「取り持ち役」を十分に演じることの助けとなったと考えられる。

不登校症例への看護援助において重要なことは、葛藤状態に陥り、混乱している彼らに安心して自己を表現し、将来を模索する場と時を提供することであろう。そのためには、彼らを通じて混乱を表している家族システムに目を向け、家族が思春期の心性を支える基盤として機能しうよう援助していく必要がある。

おわりに

今回の報告では、看護者は子どもと関わり、主治医が家族と関わるという平行面接の形を取っている。今後は、看護者が家族面接を行っていくことの可能性を探求し、実践と研究を行っていきたいと考えている。

文 献

- 1) フィリップ・バーガー著、中村伸一・信国恵子監訳：家族療法の基礎。東京、金剛出版、1993、p 3
- 2) 森山美知子：家族看護モデル～アセスメントと援助の手引き～。東京、医学書院、1995、p vii
- 3) 坂野雄二編：メンタルヘルスシリーズ登校拒否・不登校。東京、同朋社出版、1990、p 94
- 4) 齊藤万比古、生地新編：不登校と適応障害。東京、岩崎学術出版社、東京、1996、p 62
- 5) Hoffman L : Foundation of family therapy. New York, Basic Books, 1981, p 58
- 6) 加藤正明編：家族精神医学3 ライフサイクルと家族病理。東京、弘文社、1983、p 42

Nursing Support to a Boy of Non-attendance at School since His Parents' Divorce — Focusing on the Change of Family System —

Izumi SAWADA

Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

Abstract

The purpose of the present report was to assess family nursing methods used to support the cases of non-attendance at school. The subject was a fourteen-year-old boy who had not attended school for 5 years since his parents' divorce. Therapeutic interviews and play therapy were given to him once a week, while his doctor interviewed his family. As a result of the thirty-four interviews, he started going to school and was eventually promoted to high school. This process was considered in view of changes in family system. Following discoveries were made :

- 1) His maladjustment derived from the dysfunction within his family system, and especially his parents' sub-system.
- 2) As the parents sub-system improved during the course of our family interviews, he recovered his adaptability to social life.
- 3) The nurse's therapeutic interviews had positive effects on his ego-fragilitas.

From the above, two points of our nursing care should be emphasized with regards to school non-attendants. One is the importance of our supportive role in each individual case within a transitional care system. The other is our intervention to strengthen the parents' sub-system.

Key words : Non-attendant at school, Family system nursing, Divorce